

# 年間活動報告

【2020年度】

・本報告は、『千總文化研究所 年報』3号（2022年4月発行）に掲載した内容の内、以下の概要を抜粋したものである。

当研究所が主催した研究会および講演会等  
展覧会への出陳協力

当研究所の所員が実施した、講演および発表などの教育・研究活動

- ・講演会および研究会の登壇者の所属、役職は、開催当時のものを表記する。
- ・掲載画像の無断転載を禁止する。



# 真宗大谷派の法衣装束・荘厳具の調査

## 調査者

千總文化研究所 所長 加藤結理子  
中世日本研究所 所長 モニカ ベーテ  
中世日本研究所 研究員 宮尾素子  
京都府京都文化博物館 学芸員 林 智子

## [概要]

2019年度から2020年度にかけて、真宗大谷派姫路船場別院本徳寺（以下、本徳寺）が所蔵する法衣装束・荘厳具159点および、真宗大谷派の門首一族である大谷佳人氏が所蔵する法衣装束50点を対象に調査を行った。江戸時代から昭和時代にかけて制作され、僧侶が着用するなど、寺院で使用された染織品群である。

本調査の主な目的は、株式会社千總（以下、千總）が、創業の室町時代から大正時代にかけて法衣および打敷や水引といった荘厳具を扱う法衣商として活動していた実態と、それら染織品の成立背景の手がかりを掴むことであった。千總には、法衣装束および荘厳具の制作に関する見本裂帖や仕様書、図案などの資料、真宗大谷派の本山・東本願寺の御用商人であることを示す江戸時代の鑑札が残されているが、納めた染織品については、これまでほとんど明らかにされていなかった。

本調査では、法衣商である千總が「御装束師千切屋惣左衛門」として手がけたと考えられる法衣装束が約20点確認された。また千總以外の法衣商の名前が15件見られた。

さまざまな種類の法衣装束とそれらに見られる色や文様は、当時の京都における豊かな染織文化を示すものであり、本資料群は京都を起点とした人とモノの交流を窺い知ることのできる貴重な資料と言える。

千總に伝わる資料との詳細な比較調査研究は今後実施予定ではあるが、2年間の調査の概要を報告する。

本調査は、2019年度文化庁文化芸術振興補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」、2020年度公益財団法人カメイ社会教育振興財団「博物館学芸員等の内外研修に対する助成」のもと実施された。

[調査報告会・研究会]

# 真宗大谷派の法衣装束の調査報告会・研究会

日時：2021年7月9日（金）午後2時～午後4時

形式：オンライン配信

調査報告

「真宗大谷派の法衣装束と千切屋惣左衛門」2020年度調査報告

千總文化研究所 所長 加藤結理子

講演

「祈りの形—尼門跡寺院と真宗大谷派寺院に伝わる染織品をめぐって—」

中世日本研究所 所長 モニカ ベーテ

ディスカッション

同朋大学 教授 同朋大学仏教文化研究所 所長 安藤 弥

真宗大谷派圓正寺 住職 山口昭彦

真宗大谷派姫路船場別院本徳寺 列座 本谷 廣

コーディネーター：千總文化研究所 所長 加藤結理子

## [概要]

2020年度に実施した、真宗大谷派・姫路船場別院本徳寺所蔵の染織品と真宗大谷派ご門首一族に伝わる装束の調査について、報告を行った。

さらに、尼門跡寺院の装束文化や染織技法をご専門とされ、本調査の共同研究者でもあるモニカ ベーテ氏に、宗派間における装束や荘厳具の使用法や伝承法の違いについて、ご発表をいただいた。

ディスカッションでは、日本仏教史、真宗史をご専門の安藤 弥氏、ならびに真宗大谷派の僧侶の山口昭彦氏、本谷 廣氏より文献資料に見られる法衣に関する記述や法衣装束の複雑な体系と着用に関する規定などをご解説いただいた。

本会を通して、真宗大谷派をはじめ寺院に伝わる法衣装束などの染織品を、寺院の儀礼文化や宗教学の点からも捉える必要性が示された。

本会には、工芸史・日本史などの史学ならびに芸術学などの専門家、寺院関係者ら約50名が参加した。

本報告会は、2020年度公益財団法人カメイ社会教育振興財団「博物館学芸員等の内外研修に対する助成」のもと実施された。

# 千總所蔵の打敷および水引の図案の調査

## 〔概要〕

千總には、相当数の打敷および水引の図案が所蔵されている。室町時代の創業より法衣商として活動していた千總は、僧侶の衣服である法衣装束のみならず、打敷や水引といった寺院の御堂を荘厳する染織品も手掛けていたと考えられる。

千總文化研究所は、2019年度から2020年度にかけてこれらの図案の調査を行い、写真撮影および寸法・技法・模様の記事作成、一部の図案に記された墨書の翻刻を行った。

本資料には、紙に墨または彩色により模様が描かれた肉筆のものが多数を占めるが、その他に型紙を用いて模様が刷り出されたものや、特定の形に切り抜かれた別紙を貼り付けることで模様が表されたものも確認された。本資料の全

体数は約90点で、その寸法は大小さまざまである。その内の18点には、制作年、納品先、用途、使用した生地の種類と色、模様の名称、技法の名称等が記された墨書が確認された。模様の傍らに色や寸法等が記されているものもあり、本資料は制作過程において職人への指示書の役割も担っていたものと思われる。

図案は染織品の制作において最初の工程で作られるものであり、千總が手がけた染織品に関する貴重な記録とも言える。詳細な調査は今後実施予定だが、本稿では資料の概要を報告する。

本調査の一部は2019年度文化庁文化芸術振興補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」のもとに実施された。

[特別講演会]

## 皇室文化と京都伝統の技

講師：彬子女王殿下

日時：2020年12月4日（金）午後3時～午後4時

会場：千總本社ビル5階ホール

参加者：50名

### [概要]

日本の伝統文化、伝統技術はどのように後世に伝えていくべきでしょうか。ヒトとモノ、情報がかつてないほどに往来し、価値観も多様化するなかで、さまざまな分野で取り組みがなされ、議論が重ねられています。

千總文化研究所は、これまで「千總コレクションとともに日本文化の未来を考える」と題して千總の持つ有形文化財をご紹介しながら、各界の著名な研究者をお招きし、その歴史的意義と社会的位置付けをご解説いただきました。これからは、少し枠組みを広げて日本の「文化」をさまざまな視点から考察して参ります。

本講演では、彬子女王殿下をお迎えし、古来日本の文化芸術をお導きになり、またお支えになってこられた皇室の歴史、とりわけ明治時代の宮廷衣装を通して、日本の文化と伝統技術の継承についてお話いただきました。

会場には、明治時代に千總が宮内省御用達として手がけた染織品下絵など、皇室に関わる史料を展覧しました。

### [講師]

彬子女王（あきこじょう）

1981年12月20日、寛仁親王殿下の第一女子として誕生。学習院大学を卒業後、オックスフォード大学マートン・コレッジに留学。日本美術史を専攻し、在外の日本美術に関する調査・研究を行い、2010年に、女性皇族として初となる、博士号を取得。京都産業大学日本文化研究所専任研究員、京都市芸術大学客員教授、千葉大学特別教授および千葉工業大学地球学研究センター主席研究員他。

子どもたちに日本の文化を伝えるための「心游舎」を創設し、全国で活動中。著書に『日本美のこころ 最後の職人ものがたり』（小学館）、『赤と青のガウン オックスフォード留学記』（PHP研究所）、『京都 ものがたりの道』（毎日新聞社）

## 社会活動

[講演・レクチャー]

### 1. yu-an YOUTH 勉強会

日時：2020年7月25日(土) 午後6時～午後9時

テーマ：「屏風祭・千總と京都画壇」

講演者：加藤結理子

場所：ミホプロジェクト ワインサロンyu-an (京都市上京区)、オンライン同時配信

対象：学生約20名

### 2. 佛教大学四条センター公開講座「京都の伝統産業と文化」

日時：2020年12月16日(水) 午後1時～午後2時15分

テーマ：「千總の着物と歴史」

講演者：加藤結理子

場所：オンライン配信

対象：一般約20名

### 3. 一般社団法人心游舎 オンラインワークショップ

日時：2021年3月14日(日) 午後3時～午後4時30分

内容：「きもの」をテーマにしたワークショップ内で、着物の歴史についてのレクチャー

講演者：加藤結理子、株式会社千總製作本部 課長 今井淳裕

場所：オンライン配信

対象：一般約40名

### 4. オランダ平和宮 オンラインセッション

「Conservation of the Japanese silk wall hangings in the Peace Palace」

日時：2021年4月8日(木)、9日(金)、15日(木)、19日(月) 全日午後6時～午後8時30分(日本時間)

内容：オランダ平和宮における壁面装飾織物についてのセッションに向けて、

千總が明治期に手がけた美術染織品についての解説動画の提供とセッションへの参加

担当者：加藤結理子

対象：専門家約20名

[寄稿]

「THE KYOTO」連載「日本のエレガンス 千總460年」

掲載期間：2021年4月～2022年3月(予定) 毎週木曜日

掲載場所：「THE KYOTO」公式ウェブサイト

内容：千總の有形文化財より、着物文化や日本の美術工芸を紹介

担当者：加藤結理子、小田桃子

[教育]

### 1. 京都芸術大学 歴史遺産学科「文化財科学ゼミ」

日時：2020年6月1日(月)～2021年3月31日(水)

内容：非常勤講師として研究指導補助および進路指導など

担当者：小田桃子

場所：京都芸術大学歴史遺産学科

対象：学部生16名

## 展覧会協力

### 1. 千總展 画壇と染織 日本の美を描くーデザインカの根源

会場：高島屋京都店 グランドホール

会期：2020年8月21日（金）～8月26日（水）

〈出品作品〉

岸竹堂筆 下絵〈崖に虎図〉、岸竹堂筆 下絵〈柳牡丹に小禽〉、岸竹堂筆 下絵〈水中遊鯉〉、今尾景年筆 下絵〈狗児〉、  
今尾景年筆 下絵〈柳に鷺〉、今尾景年筆 下絵〈菊に小禽〉、西村總左衛門、今尾景年原画〈景年花鳥画譜〉、裾模様〈梅に源氏窓〉、  
裾模様〈正倉院裂〉、裾模様〈流水に花扇〉、商工省〈奢侈品等製造販売制限規則第一・第二條第一項但書に依る許可申請書〉、  
十三代西村總左衛門夫人 婚礼衣装〈松に鶴文様振袖〉、十三代西村總左衛門夫人 婚礼衣装〈御殿文様打掛〉

### 2. Kimono: Kyoto to Catwalk

会場：Victoria and Albert Museum (UK)

会期：2020年8月27日（木）～10月25日（日）

出品作品：ヨウジヤマモト〈振袖〉 および〈帯〉

### 3. 江戸の動物絵大集合！ 猿描き狙仙三兄弟～鶏の若沖、カエルの奉時も

会場：熊本県立美術館

会期：2020年7月18日（土）～9月6日（日）

出品作品：森狙仙筆〈猪図〉

[Research 1]

# Survey of clerical garments and altar cloths of the Ōtani-ha School of Jōdo Shinshū Buddhism

## Researchers

Kato Yuriko Director, Institute for Chiso Arts and Culture  
Monica Bethe Director, Medieval Japanese Studies Institute  
Miyao Motoko Researcher, Medieval Japanese Studies Institute  
Hayashi Tomoko Curator, The Museum of Kyoto

## Summary

Between FY2019 and FY2021, clerical garments (*bōi shōzoku*) and decorative items like altar cloths (*uchishiki*) dating from the Edo period (1603-1867) to the Showa period (1926-1989) were researched: 159 items at Himeji Senba Hontokuji Temple, a branch temple of the Ōtani-ha School of Jōdo Shinshū Buddhism, and 50 items belonging to Ōtani Yoshihito, a member of the main Ōtani-ha family.

The main objective of the survey was to gain a better understanding of the activities of Chiso from its establishment in 1555 until the early 20th century, when it operated as supplier of clerical garments and decorative items, and of how such textile products developed. Chiso holds a collection which includes books of samples, specification documents, and design drawings related to the production of clerical garments and decorative items, as well as permits dating back to the Edo period attesting that Chiso was a supplier to Higashi Hongan-ji, the head temple of the Ōtani-ha School. However, until now little was known about the textile products that were actually delivered.

In the course of this survey, 20 clerical garments were identified as made by Chiso under the name

“Onshōzokushi Chikiriya Sōzaemon”, when it operated as a clerical garment trader. Additionally, the names of 15 other clerical garment traders from Kyōto apart from Chiso were found. The diversity of types of clerical garments and the colors and patterns they exhibit show the rich culture of textile production in Kyōto at that time and represent a valuable source of information on the exchange network of people and goods that originated from Kyōto.

A detailed comparative analysis with the materials held by Chiso will be carried out in the future. This report summarizes the results of the two years of survey.

This survey was funded by the FY2019 “Project for the Support of Joint Creative Activities Between Museums and Local Communities” Grant for the Promotion of Arts and Culture of the Agency of Cultural Affairs (Japanese Government) and the FY2020 “Grant for the Training of Museum Curators” of the Kamei Foundation for the Promotion of Social Education.



[Symposium]

## Symposium on the Survey of Clerical Textiles from the Ōtani School of Jōdo Shinshū Buddhism

Date: Friday, July 9, 2021, 2:00 pm to 4:00 pm

Format: Online

### Survey Report

Report on the Survey of Clerical Garments and Chikiriya Sōzaemon, FY2020

**Kato Yuriko** Director, Institute for Chiso Arts and Culture

### Lecture

The Prayer Materialized: On the Textiles held at Amamongzeki Convents and Ōtani-ha Temples

**Monica Bethe** Director, Medieval Japanese Studies Institute

### Discussion

**Andō Wataru** Professor, Dōhō University Director, Dōhō University Research Institute of Buddhist Culture

**Yamaguchi Akihiko** Chief Priest, Enshō-ji Temple, Ōtani-ha School

**Mototani Hiroshi** Priest, Himeji Senba Hontoku-ji Temple, Ōtani-ha School

**Coordinator: Kato Yuriko** Director, Institute for Chiso Arts and Culture

### Summary

The Symposium presented the results of the survey carried out during FY2020 of garments held by the Himeji Senba Hontokuji Temple and the Ōtani Family of the Ōtani-ha School of Jōdo Shinshū Buddhism.

In addition, Monica Bethe, co-researcher in this survey and long-time researcher of the Amamongzeki imperial convents, gave a presentation on the differences between Buddhist Schools in the way they use and transmit clerical garments and altar decorations.

During the discussion, researcher of history of Japanese Buddhism and history of Jōdo Shinshū Buddhism Andō Wataru, and Ōtani-ha School priests Yamaguchi Akihiko and Mototani Hiroshi, explained about the mentions to these garments found in historical documents, and the complex rules and etiquette surrounding them.

The need to understand the textiles held by Buddhist temples also from the point of view of their ceremonial culture and religious studies became clear through this symposium.

The symposium was attended by around 50 participants, including experts in history of applied arts, Japanese history and science of arts.

The symposium was funded by the FY2020 "Grant for the Training of Museum Curators" of the Kamei Foundation for the Promotion of Social Education.

## Survey on the *Uchishiki* and *Mizuhiki* in the Chiso Collection.

### Summary

Chiso keeps a large collection of design drawings of *uchishiki* (altar cloths) and *mizuhiki* (decorative cords). Since its foundation in 1555 as a clerical garment trader, Chiso produced and supplied not only clothing but also textile products such as *uchishiki* and *mizuhiki* used for the decoration of Buddhist temples.

The Institute for Chiso Arts and Culture carried out a survey of these design drawings from FY2019 to FY2020. The survey consisted of photographing and documentation of the measurements, techniques, and patterns of these drawings, as well as reproduction of part of the ink writings found on them.

The majority of these drawings were painted by brush, directly applying color or ink on paper. Additionally, some of them were printed using paper patterns, and in other cases the pattern was created by pasting on a base paper a motif cut out from another paper. In total, approximately 90 drawings of different sizes were surveyed. 18 of them included ink writings detailing their date of creation, place

of delivery, purpose, type and color of the fabric, name of the pattern, and name of the technique. The fact that details regarding color and measurements were written next to the patterns suggests that these drawings were used as instructions for the craftspeople during the production process.

The creation of design drawings is the first step in the making of textile products. Therefore, this collection of design drawings represents a valuable record of the textile production developed by Chiso. Although a detailed survey is still to be carried out, this report gives an outline of this collection of documents.

Funded by the FY2019 “Project for the Support of Joint Creative Activities Between Museums and Local Communities” Grant for the Promotion of Arts and Culture of the Agency of Cultural Affairs (Japanese Government).

[Special Lecture]

# The Culture of the Imperial Household and the Traditional Craftsmanship of Kyoto

Lecturer: HIH Princess Akiko

Date: Friday, December 4, 2020, 3:00 pm to 4:00 pm

Venue: Chiso Building 5th Floor Hall

Participants: 50

## Summary

How should traditional Japanese culture and techniques be handed down to future generations? In an age characterized by an unprecedented exchange of people, goods and information, and increasingly diversifying values, several initiatives have been set in motion in different fields, and discussions are ongoing.

The Institute for Chiso Arts and Culture, under the project title “Exploring the Future of Japanese Culture with the Chiso Collection”, has been presenting tangible cultural properties held in the Chiso Collection and inviting prominent researchers from different fields to analyze their historical and social significance. In the future, we intend to broaden the horizon and discuss Japanese “Culture” from multiple points of view.

In this lecture, HIH Princess Akiko discussed the history of the Imperial Household as a leader and supporter of Japanese culture and art, focusing especially on the court garments of the Meiji Period as an example of the transmission of Japanese culture and traditional techniques.

Historical documents illustrating the relationship between the Imperial Household and Chiso, such as paintings for textile products created by Chiso as a Purveyor of the Imperial Household during the Meiji period, were exhibited at the venue.

## Lecturer

HIH Princess Akiko was born on 20 December 1981 as the first daughter of HIH Prince Tomohito. After graduating from Gakushūin University, she studied in Merton College, Oxford. She specialized in Japanese Art History and conducted research on Japanese Art conserved outside Japan. She earned her doctoral degree (the first female member of the Imperial Family to do so) in 2010. She is a full-time researcher at the Institute of Japanese Culture of the Kyōto Sangyō University, a visiting professor at the Kyōto City University of Arts, a special professor at Chiba University, and a head researcher at the Institute for Geo-Cosmology of the Chiba Institute of Technology. She is the founder of Shinyūsha, a nationwide organization dedicated to teaching children about Japanese culture. She is the author of “Saigo no Shokunin Monogatari: Nihonbi no Kokoro” (“Japanese Art; Untold Stories – Last Artisans”, Shōgakukan), “Aka to Ao no Gaun – Okusufōdo Ryūgakuki” (“The Red and Blue Gown: Memoirs of Studying at Oxford”, PHP Kenkyūjo), and “Kyoto Monogatari no Michi” (“Tales of the Streets of Kyoto”, Mainichi Shinbunsha).